

## インドシナ道中記

2018年4月17日から24日までカンボジアとヴェトナムに行ってきました。前から是非見たかったアンコールワットの日の出とタプロームの木々に呑み込まれた寺院を目の当たりにしに出掛けたのですが、飛行機の便の都合上ヴェトナムにも2泊しました。この旅行は自分たちだけの個別のツアーではありませんでしたが、自分で工夫した日程でもアトラクションでもありませんでした。それでも現地に立って現地の匂いを嗅ぎ、日差しと喧騒の中に身を置けば、それなりに感じることもあります。高々5日ほどの駆け足訪問ではありますが、その感じたものを忘れないうちに書き残しておこうと思います。

### 1. ホーチミンの風

4月30日、この日はドイツのヒトラーの命日です。そしてまたサイゴン(現ホーチミン)市が陥落してヴェトナム戦争が終結した日でもあります。2018年4月27日に韓国の文在寅大統領と金正恩朝鮮労働党委員長の板門店での歴史的で劇的な会談が行われて以来、まるで朝鮮半島に恒久平和が訪れたかのような希望的観測の論調が目立っています。

そうであって欲しいと願う気持ちはやまやまですが、一方で「歴史は繰り返す」という厳然たる大命題が頭から離れません。

「目下彼らが話し合いに参加しているのなら、つまりこれは彼らが他の方法で勝つことが出来なくて、やむなく話し合いを強いられているのだということです」

これは1968年4月19日に単身、南ヴェトナム政府に出頭した北ヴェトナム正規軍の政治将校チャン・ヴァン・ダック中佐(当時)が記者会見に応じた際の言葉で、記者会見の膨大なやり取りを作家開高健氏が翻訳したものの一断片です。50年たって、今仮に北から南へ転向した将校がいたとしたら、どんな記者会見をするのかと想像すると、このダック氏の言葉が改めて生気を帯びてくる気がするのはわたしだけでしょうか。



開高健氏が定宿にしていたホテル・マジェスティックにて。古い写真の下のプレートは1925年創業時フランス領だったことからフランス語つづりになっていますが、頭の後ろの大きなプレートは英語表記になっています。

シエムリアップを飛び立ったエアバス321が見渡す限りの街の灯の上を飛び始めた時、わたしは知らず知らずヴェトナム戦争の面影を探していた自分が恥ずかしくて、ひとり苦笑していました。サイゴン陥落から既に43年が経とうとしているのです。太平洋戦争が終結した1945年から43年後とえば1998年です。東京や大阪に戦争の面影を求めることができるかどうか、あまりにも自明の愚かな感傷に恥ずかしくなったのです。

実は今回の旅には開高健氏の「サイゴン十字架」だけを持っていきました。それは開高健ルポルタージュ選集の一冊で、1968年と1973年のサイゴンについて、彼らしいわたしにとっては宝石にも等しい言葉をちりばめて書かれた報告書です。つまり、わたしにとって、この人口800万人を超える大都市も、1973年のサイゴンのまま凍結保存されていたのかも知れません。

ただ、我々の一行4人の滞在中の現地ガイド、ヒュー君が「ホー・チ・ミン」を呼ぶ時、必ず「ホー・チ・ミン様」と呼ぶことに少し耳がいらがゆく感じました。ヴェトナム戦争が終結してから生まれたであろう年恰好であり、日本に研修生として長期滞在した経験のあるヒュー君が、1969年に死去しているホー・チ・ミンに「様」を付けて呼ぶことは、当たり前と言えば当たり前なのですが、やはりわたしの耳は聞くたびにひりつくのです。

ヴェトナム戦争当時、サイゴン駅だった中央郵便局は郵便局というよりは観光地の一つとなっています。その中央郵便局の正面の壁には、この国の「建国の父」である「ホーおじさん」の肖像画が、そう呼ばれるにふさわしい優しい眼差しで飾られていました。1975年当時、彼はもういなかったのですが、それでもわたしはヴェトナム戦争終結後に起きた様々な、忌まわしい出来事をどうしても思い出してしまうのです。



旧サイゴン駅はフランス統治時代の面影を残していますが、現在は中央郵便局に改装され、当時の出札口はそのまま郵便局の窓口になって、列車を待つ人の代わりに土産物を物色する観光客でごった返しています。正面の壁には「ホー・チ・ミン」の大きな肖像画が飾られて、人々を優しい眼差しで見下ろしていました。



中央郵便局の  
前の広場では、  
ちょうど高校生  
たちが卒業式の  
前撮りをしてい  
ました。屈託の  
ない底抜けの明  
るさの子どもた  
ちの顔を見てい  
ると、どんなに  
先の見えない泥  
沼の戦争でさえ、  
時間が消しゴムで  
消してくれるの  
だということを  
いまさらのよう  
に実感しました。



インドシナ戦争、ベトナム戦争、中越戦争、カンボジア内戦などなど、20世紀のインドシナは1000万人にも上る人々の屍体を乗り越えて現在の明るく平和な社会を手に入れました。この21世紀になって生まれたであろう若者たちが、自分たちの国の過去の言葉にも言い尽くせない経験と歴史を、どの様に自分たちと自分たちの未来に向けて活かしていくのかと、いらぬ世話ながらわたしはつい考えてしまうのです。